

日本英文学会関西支部 第17回大会資料

プログラム

研究発表・シンポジウム要旨

日時：2022年12月18日（日）11：00より

会場：甲南大学（〒658-8501 兵庫県神戸市東灘区岡本 8-9-1）

日本英文学会関西支部事務局

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学 文学部 英米文学専攻内

E-mail: kansai2@elsj.org

※お知らせ

今年度大会は、会場での対面形式での開催を目指しておりますが、状況次第では Zoom を用いたオンライン開催となる可能性があります。(対面開催の際の教室番号を含む) 詳細につきましては、後日ホームページ上でお知らせします。

日本英文学会関西支部第 17 回大会プログラム

日時：2022 年 12 月 18 日（日）11：00 より

会場（大会本部）：甲南大学（〒658-8501 兵庫県神戸市東灘区岡本 8-9-1）

開 会 式 11：00 より

挨拶 日本英文学会関西支部支部長 竹村 はるみ

研究発表 第 1 発表 11：10～11：50 第 2 発表 12：00～12：40
第 3 発表 13：30～14：10 第 4 発表 14：20～15：00

第 1 室

1. （発表なし）

司会 大阪公立大学教授 野 末 紀 之

2. 憧憬の風景：ウォルター・ペイターのヴィジョン

京都大学大学院生 虹 林 桜

司会 大阪公立大学教授 田 中 孝 信

3. 社会の周縁から作品の中心へ

——『オリバー・ツイスト』と『万引き家族』における擬似家族、犯罪者とマグダラのマリアたち
京都ノートルダム女子大学講師 木 島 菜菜子

4. 【招待発表】新たな創作の形を求めて——『ニコラス・ニクルビー』におけるジャンルの変容——

ノートルダム清心女子大学教授 新 野 緑

第 2 室

司会 関西学院大学教授 松 宮 園 子

1. 女性と貧困——『自分だけの部屋』と『三ギニー』から読み解くヴァージニア・ウルフの階級意識

神戸大学大学院生 梅 田 杏 奈

2. *The Buried Giant* における虚構の自我——Kazuo Ishiguro 作品における「変身願望」のテーマをめぐって

京都大学大学院生 肖 軼 群

司会 京都大学教授 栗山 智成

3. 【招待発表】五感から読む『ロミオとジュリエット』
——エリザベス朝抒情詩のエロティシズムからの考察

近畿大学教授 藤澤 博康

4. (発表なし)

第3室

司会 京都女子大学教授 鴨川 啓信

1. ユングで読む *Dracula*——影とアニメ

龍谷大学准教授 谷 綾子

2. 『嵐が丘』におけるキャサリンの〈希望に満ちた諦念〉
——ヒースクリフの「汚れた」肌とエドガーの「意思／遺書」

京都大学大学院生 杉野 久和

3. (発表なし)

4. (発表なし)

第4室

司会 大阪大学特任助教 三宅 一平

1. Holden Caulfield の閉回路——*The Catcher in the Rye* における南への欲望

京都府立大学大学院生 土岐 光一

司会 神戸大学助教 平川 和

2. DeLillo's Taoist Writing and the Counterculture in *Great Jones Street*

大阪大学大学院生 王立 瑠

司会 近畿大学准教授 松本 ユキ

3. 連帯して語ること——Julie Otsuka の *The Buddha in the Attic* における“we”と“they”の視線

神戸大学大学院生 小谷 真由

司会 奈良大学教授 古木 圭子

4. 【招待発表】D. H. Hwang の〈日本物〉連作劇 *Sound and Beauty* における美と正義
——「審美的オリエンタリズム」を超えて

神戸大学教授 山本 秀行

第5室

司会 奈良教育大学教授 米 倉 よう子

1. 起動動詞の補部に見る語彙の選択——start NP の統語と意味——

神戸学院大学講師 藏 菌 和 也

2. オーディション番組出場パフォーマーへの審査コメントの言語分析：パフォーマー化する審査員たち

摂南大学教授 齋 藤 安以子

司会 関西外国語大学准教授 大 宗 純

3. 感情的モダライザーとしての補文標識 for に関する研究

関西外国語大学助教 森 田 竜 斗

4. 【招待発表】日本語スルーシングにおける定性の不一致について

同志社大学准教授 瀧 田 健 介

シンポジウム 15:20~17:40

英米文学部門

ジェンダーロールの呪縛と越境

司会・講師	関西学院大学教授	竹 山 友 子
講師	武庫川女子大学教授	前 原 澄 子
講師	奈良女子大学教授	齊 藤 美 和
講師	近畿大学准教授	西 垣 佐 理
講師	奈良女子大学准教授	中 川 千 帆

英語学部門

インタラクションの中の言語学

司会・講師	京都工芸繊維大学教授	深 田 智
講師	大阪大学教授	早 瀬 尚 子
講師	杏林大学准教授	八木橋 宏 勇
講師	桜美林大学准教授	多々良 直 弘

総 会 17:40 より

閉会式 18:00 より

挨拶 日本英文学会関西支部大会準備委員長 石 川 玲 子

研究発表要旨

第1室

第1発表 (11:10 より)

(発表なし)

司会 大阪公立大学教授 野末 紀之

第2発表 (12:00 より)

憧憬の風景

ウォルター・ペイターのヴィジョン

京都大学大学院生 虹 林 桜

本発表ではウォルター・ペイターの作品における「憧憬」を取り上げ、自伝的随筆「家の中の子供」(“The Child in the House,” 1878) などを中心に、ペイターの美学が描く風景についての考察を試みる。ペイターの生きた19世紀後半は写実主義の時代であり、文学に表される風景は客観的対象物として表現されがちであった。一方、世紀末の風潮は個人の内面の表現として風景を捉えようとする。このような時流の中、ペイターは風景のもつ多義性を独特の散文スタイルに折り込むことで独自の景色を生み出している。これにはドイツ・ロマン主義の「憧憬 (Sehnsucht)」の概念、そして郷愁の感情が深く関わっていると考えられる。本発表ではそれが個人的な感性と記憶としてどのように郷愁と関連することで風景に描写されるのか、特に視覚の問題にも触れながら考察したい。

司会 大阪公立大学教授 田中 孝信

第3発表 (13:30 より)

社会の周縁から作品の中心へ

——『オリバー・ツイスト』と『万引き家族』における擬似家族、犯罪者とマグダラのマリアたち

京都ノートルダム女子大学講師 木 島 菜菜子

「窃盗をすることで生活を支える血の繋がっていない家族」が登場するという点において、現代日本社会の一端を描いた是枝裕和監督の『万引き家族』は、19世紀イギリス社会の一端を描いた文学作品『オリバー・ツイスト』と類似した要素を持っている。この二作品は、特殊な家族の形態だけでなく、犯罪者や子ども、女性、そして権力を類似する観点から描き出し、ともに出版・公開後に批判を浴び、作者・監督に作品の弁明をさせることとなった。これらの批判と弁明は、両作品が社会の周縁に追いやられている人々を中心に据えていることを示唆している。本稿は、両作品の主題やモチーフ、および否定的評価を再検討することで、社会の中で否認され沈黙させられる人々の「声なき声」を、彼らに代わって発することに成功した彼らの作品は、社会の周縁に追いやられている人々を作品世界の中心へと引き込むという芸術の役割の一つを担っていることを再確認しようと試みるものである。

第4発表 (14:20 より)

【招待発表】

新たな創作の形を求めて

——『ニコラス・ニクルビー』におけるジャンルの変容——

ノートルダム清心女子大学教授 新野 緑

ディケンズは三作目の長編『ニコラス・ニクルビー』刊行直前の宣伝文で、「剽窃者へ」と題する警告を掲げ、「我々だけが正真正銘の『ボズ』だ」と主張した。著作権が未だ確立しない時代、許可なく彼のペンネーム Boz をもじった Bos や Poz の名で『ピクウィック・ペーパーズ』や『オリヴァー・トゥイスト』の登場人物名や描写の一部を書き換えた小説や恣意的な抜粋、稚拙な脚色演劇が次々と出されたことへの苛立ちが、そこにある。出版社との契約では、『ニクルビー』は内容も形式も『ピクウィック』を踏襲する作品となるはずだった。しかし、『オリヴァー』の連載と並行しつつ、月刊雑誌の編集、パントマイム道化師の回想録の編纂、雑誌や新聞に寄稿した小品集『ボズのスケッチ』の月刊分冊形式への再編纂など様々なジャンルの創作活動に携わり、同時に自作の多種多様なアダプテーションを目にしたはずのこの時期、自身の創作の在り方そのものにディケンズがつとめて意識的になったことは確かだろう。『ニクルビー』において、作家ディケンズが独自の小説世界を模索する過程を、作品中に記されるジャンルとその変容に着目しつつ、考えてみたい。

第2室

司会 関西学院大学教授 松宮 園子

第1発表 (11:10 より)

女性と貧困

——『自分だけの部屋』と『三ギニー』から読み解くヴァージニア・ウルフの階級意識

神戸大学大学院生 梅田 杏奈

本発表はヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) によるふたつのエッセイ『自分だけの部屋』(*A Room of One's Own*, 1929) と『三ギニー』(*Three Guineas*, 1938) において、女性が被害者として位置づけられていることに注目し、そこからウルフの中産階級女性としての誇り及び未知なる貧困への無理解を読み取る試みである。両性具有を謳う作家としてしばしば取り上げられるウルフだが、ここではあえて男女を区別することで女性を弱者として演出し、貧困と結びつけることで巧みに同情を誘うことに成功している。しかしその反面、飢えに苦しむ本当の貧困については顧みていない。『三ギニー』においては、「あなたがた」と「わたしたち」とに男女を分類して連帯感を演出するが、この「わたしたち」には稼ぎを目的とする作家が除外されている。貧乏人を論外とする姿勢の表れである。本発表では、このように男女を線引きし、女性を貧困と結びつけたために生じた問題点から彼女の階級意識を明らかにする。

第2発表 (12:00 より)

The Buried Giant における虚構の自我

——Kazuo Ishiguro 作品における「変身願望」のテーマをめぐる

京都大学大学院生 肖 軼 群

本発表は、Kazuo Ishiguro の長編第七作 *The Buried Giant* を読み直し、「変身願望」のテーマについて検証することを目的とする。イシグロ研究においては、しばしば「記憶」のテーマが取り上げられるが、本作品ではその他に、作者がアイデンティティを変える欲求、即ち「変身願望」のテーマを表出していることに着目したい。現在のアイデンティティに不満を抱く登場人物たちは、幻想によって新たな自我を作り上げていくが、最終的には、虚構の自我像を達成することが不可能であるという認識に至る。本発表では、アイデンティティの境界線上にいる登場人物たちを分析し、それぞれに秘められた「変身願望」の生起から結末に至るまでのプロセスを分析する。さらに、前後に出版された *Never Let Me Go* (2005) および *Klara and the Sun* (2021) と本作品との比較を通して、イシグロ文学に通底する「変身願望」のテーマが近年の作品においていかに変容しているかを明らかにすることによって、本テーマに関する考察を発展させたい。

司会 京都大学教授 葉山 智成

第3発表 (13:30 より)

【招待発表】

五感から読む『ロミオとジュリエット』

——エリザベス朝抒情詩的エロティシズムからの考察

近畿大学教授 藤澤 博康

『ロミオとジュリエット』は五感に関する表現が豊かな劇である。手と手を合わせる行為からジュリエットとの接吻にまで漕ぎつけるロミオの口説き文句、バルコニーの場面でのロミオによる窃視、同場面での闇夜のなかで聴覚を通して交わされる甘い言葉のやり取り、「バラはバラという名前でもなくても芳しい香りがする」と述べてロミオに家名を捨てよと願うジュリエットの祈りなど、印象的な感覚表現がこのテキストには散見される。

たしかに特定の感覚に焦点を当てて、このテキストを分析する試みはこれまでも行われてきた。しかし、この劇に乱雑に配置されたように見える感覚表現に補助線を引き、五感の観点からなにかの星座を描き出すことは不可能であろうか。本発表では、1590年代に流行していた抒情詩的エロティシズム（ソネット連作と、オディウスの影響を受けた恋愛詩）を導きの糸として、この劇の五感表象について考察する。

第4発表 (14:20 より)

(発表なし)

第3室

司会 京都女子大学教授 鴨川 啓信

第1発表 (11:10 より)

ユングで読む *Dracula*

——影とアニマ

龍谷大学准教授 谷 綾子

Dracula(1897)の物語はイギリスの弁護士 Jonathan Harker が東欧 Transylvania にやってくるところから始まる。Edward Said は東洋とは西洋が認めたくない事柄(官能性、退廃)の投影先であると指摘する。つまり西洋人である Jonathan が西洋の無意識界とされる東欧 Transylvania で体験する出来事には、Jonathan 自身が無意識下に抑圧している性的願望が反映されていると考えることができる。本発表では Jonathan 及び彼と強い連帯感で結ばれる男達が、西洋の無意識を表象する東の悪魔 Dracula を倒す過程が Carl Gustav Jung における自己実現のモデルに近いことに着目し、Jung の個性化のモデルを通して Dracula の登場人物達の精神的成長について考察していく。

第2発表 (12:00 より)

『嵐が丘』におけるキャサリンの〈希望に満ちた諦念〉

——ヒースクリフの「汚れた」肌とエドガーの「意思／遺書」

京都大学大学院生 杉野久和

本発表は、ヒースクリフとエドガーの二人に愛され、そして、二人を「合理的に」愛したキャサリンが至った〈希望に満ちた諦念〉を明らかにする試みである。注目するのは、ヒースクリフの肌に対するキャサリンの視点である。作品内に登場する人物たちがヒースクリフについて「ジブシー」と繰り返し述べているだけでなく、先行研究もヒースクリフを「アイルランド人」と指摘したりと、彼(の肌)は人種との関連で推論されている。しかし、当時の若いキャサリンがヒースクリフの「黒い」肌を巨視的に人種の問題として解釈できていたか疑問であろう。せいぜい「ヒースクリフとキャサリンの容姿の色が違う」程度だったのかもしれない。

ヒースクリフとの出会い、リントン家訪問、そして、身なりの変化を論拠に、キャサリンがヒースクリフの「黒い」肌を「汚れた」肌と認識していた可能性を提示したい。最後に、キャサリンが「合理的に」導き出した〈希望に満ちた諦念〉を揺るがず、エドガーの「意思」に論究する。

第3発表 (13:30 より)

(発表なし)

第4発表 (14:20 より)

(発表なし)

第4室

司会 大阪大学特任助教 三宅一平

第1発表 (11:10 より)

Holden Caulfield の閉回路

——*The Catcher in the Rye* における南への欲望

京都府立大学大学院生 土岐光一

J. D. Salinger の *The Catcher in the Rye* (1951) は、主人公 Holden Caulfield の内面に絶えず焦点を当てる。物語の終盤、精神病院と思しき場所で過去の出来事を語る Holden は、「懐かしく思う」という情動と「捉え損

なう」という行為を意味する“miss”という単語を繰り返し用いることで、かつて忌み嫌っていた人々と自身との間に改めて線を引こうとする。Mary McCarthy は、その Salinger 論で「閉回路 (closed circuit)」という表現を用いて Holden の閉鎖的な精神構造を批判したが、このメタファーが持っているはずの空間性は本作の別の側面を照射もする。というのも、ニューヨークをさまよい、西部で新たな生活を送る空想に耽り、やがてその西部で施設に入るという皮肉な結末を迎える Holden の旅路は、文字通り北米大陸という空間の移動によって特徴付けられているからだ。本発表では McCarthy が用いた閉回路という表現を脱修辭化し、そして同時代の映画にまつわる言説を踏まえることで、「南への欲望」を隠し見せる *Catcher* の空間表象を検討する。

司会 神戸大学助教 平 川 和

第2 発表 (12:00 より)

DeLillo's Taoist Writing and the Counterculture in *Great Jones Street*

大阪大学大学院生 王 立 瑠

Despite its thousands-year longevity and nationwide acceptance in China, Taoism remained lesser-known in the United States until the 1960s, when the counterculture movement swept there. The counterculture youth not only rejected mainstream culture but also turned their eyes to Eastern religions. This is the milieu of Don DeLillo's *Great Jones Street* (1973), which tells the story of the reclusive life of rock legend Bucky in Manhattan. Previous studies have focused on topics like the comparison between the fictional character Bucky and real-world artist Bob Dylan, Buddhist interpretations of the novel, and the novel's depiction of the artist-audience relationship in the capitalist society. Considering a. the resemblance between Bucky and Dylan, b. the anecdote of Dylan's inclusion of *I-Ching* into lyrics, and c. DeLillo's mention of Yin and Yang in other novels, this presentation aims at revealing the potential connection between *Great Jones Street* and Taoism. Through the reference to Taoist concepts including the butterfly dream, the transformability of opposites, and inaction, this presentation uncovers the parallel between Taoism and the novel, and my Taoist interpretation of *Great Jones Street* opens a cross-cultural dialogue between Eastern culture and American literature.

司会 近畿大学准教授 松 本 ユ キ

第3 発表 (13:30 より)

連帯して語ること

—Julie Otsuka の *The Buddha in the Attic* における“we”と“they”の視線

神戸大学大学院生 小 谷 真 由

Julie Otsuka(1962-)の長編 *The Buddha in the Attic*(2011)は、「写真花嫁」としてアメリカに渡った日本人女性や、太平洋戦争勃発後の日系人を取り巻くアメリカコミュニティを描いた、“we”という一人称複数の語りが特徴的な作品である。同一性が他者との差異を通して形成されるという考えに基づくと、“we”が“they”という他者との関係の中で、自他双方からの差異化によって「日系女性一世」という自己定義を試みていると考えられる。そして差異化による“we”の連帯が、抑圧された記憶を一つの声として語ることを可能にしている。一方でこの連帯は、戦争の勃発を境に不安定なものとなる。これは“we”内部での相互信頼の喪失と、アメリカ国家という強大な権力による「アメリカ」と「日本」という二項対立の押し付けが、「日系一世女性」という“we”の自己定義を困難にすることの表象であると考えられる。本発表では、“we”の語りが生み出す“they”との関係を分析することで、本作におけるマイノリティとして記憶を語る際の差異化と連帯の重要性や、マジョリティ社会の無関心の暴力性を明らかにする。

司会 奈良大学教授 古木 圭子

第4発表 (14:20 より)

【招待発表】 D. H. Hwang の〈日本物〉連作劇 *Sound and Beauty* における美と正義
——「審美的オリエンタリズム」を超えて

神戸大学教授 山本 秀行

中国系アメリカ人劇作家 David Henry Hwang (1957-)の日本を主題とする一幕劇二作品 *The House of Sleeping Beauties* と *The Sound of a Voice* は、*M. Butterfly* (1988)でアジア系初のトニー賞を受賞する5年前の1983年に *Sound and Beauty* というタイトルの下、ニューヨークの Public Theater で初演された。主として中国系アメリカ人を描く他の Hwang の劇とは異なり、この連作劇は、前者が川端康成の中編小説『眠れる美女』(1961)を、後者が小泉八雲の『怪談』(1904)のような日本の説話を元にして書かれている。本発表では、この〈日本物〉連作劇を、柄谷行人が「美学の効用—『オリエンタリズム』以後」(1997)で批判した、政治的意識とは無関係に「劣った他者〔東洋〕を美的に崇拝する」という態度に存するオリエンタリズムの審美的側面（いわば「審美的オリエンタリズム」）からだけでなく、Elaine Scarry が *On Beauty and Being Just* (1999)で看破した「正義」を導きだす「美」の肯定的側面からも再考したい。

第5室

司会 奈良教育大学教授 米倉 よう子

第1発表 (11:10 より)

起動動詞の補部に見る語彙の選択

——start NP の統語と意味——

神戸学院大学講師 藏 菌 和 也

本発表では、起動動詞 *start* が補部に名詞がくる場合(以降、*start NP* と呼ぶ)の統語的・意味的特徴を詳しく記述することを目的としている。具体的には、*start* や補部にくる形式のどのような意味が、補部にくる名詞の語彙選択に影響を与えているかを明らかにする。

従来の研究では、*start NP* で使われる語として、組織やグループを表す *team, band, riot*、あるいは事業や計画を表す *company, business, agency, shop, factory* などの名詞、さらに車や機械を表す *engine(s), car* などが挙げられている一方、なぜこれらの語が *start NP* で用いられるのかについて十分な説明が与えられていないように思われる。

start の持つ運動の開始、出来事の開始の意味がこれらの統語的な特徴に影響を与えていることを説明していくとともに、*start* の類義語である *begin, commence* との特徴の違いを示しながら、*start* が就学する(*start school*)、家族をつくる(*start a family*)、事件を起こす(*start trouble*)等の独自のコロケーションを形成して「個人の行為の開始」を表す独自の語法を有することを実証的に示していく。

第2発表 (12:00 より)

オーディション番組出場パフォーマーへの審査コメントの言語分析

パフォーマー化する審査員たち

摂南大学教授 齋 藤 安以子

オーディション番組の言語研究の多くがボライトネスの欠如を扱う。前提は審査員が強者、パフォーマーは弱者、である。そして無礼さが横行する演出の番組の多くでは、視聴率は高いが、優勝者が大成しない。

①出場者が圧倒的な実力を示すと、審査員はどう語るのか。②審査員が礼儀正しく出場者が成功するオーディションは商業的に可能か。この2点を追って、小論は、オーディション番組の審査コメントを、2011年に米国で放映された *The Sing-off* 第3シーズンとその優勝者 *Pentatonix* を例に分析した。結果は、公正な審査員がファンにもメンターにもなれることを示す。同番組以降、審査過程の喜びや迷いを追う、パフォーマンス化した審査員のリアリティーショーが出現した。審査者が辛辣な批評で権力を乱用する代わりに、自ら現役演者として活躍し、豊かな感情表現をボライトに行い、他者の成長を補佐する姿が、娯楽番組としても成立する。

司会 関西外国語大学准教授 大 宗 純

第3発表 (13:30 より)

感情的モダライザーとしての補文標識 *for* に関する研究

関西外国語大学助教 森 田 竜 斗

これまで、補文標識 *for* は、不定詞の主語を明示するために機械的に導入される固有の意味を持たない文法的な標識であるとみなされてきた。しかし、言語事実に着目してみると、*for* 補文が未来時や過去時などさまざまな時間を表す事例や、補文標識 *for* と上位述語との間に共起制限がある事例などが多数存在している。こうした事例は、補文標識 *for* が固有の意味を持たない文法標識であるという従来の分析では説明することが不可能である。そこで本研究では、第一に、*Declerk (2011)* によるモダリティの定義を批判的に検証したうえで、モダリティの本質を「ある事柄に対する捉え方や心的態度を表出すること」にあることを主張する。第二に、補文標識 *for* が感情述語と共起する事例に焦点を当て、補文標識 *for* が「感情的モダライザー」として機能し得ること、そして補文標識 *for* と上位節の感情述語との間に、「感情性」という点でモータルハーモニーが成立していることを例証する。

第4発表 (14:20 より)

【招待発表】 日本語スルーシングにおける定性の不一致について

同志社大学准教授 瀧 田 健 介

本発表では、まず日本語において節の定性の不一致にも関わらずスルーシングが可能となる場合があることを指摘する。(1)では先行節が不定詞節であり、(2)では先行節が定形節であるが、先行節に一致する形式は主節動詞の補文としては許されない。それにも関わらずスルーシングが可能であることは、統語的同一性条件にとって問題となりうる。

- (1) 太郎は [どこかへ行こうと] していたけど、君は [どこへ {Δ/行く/*行こう} か] 知っていますか?
- (2) 太郎は [どこかへ行ったと] 言っていたが、実際は [どこへ {Δ/行こう/*行っただ} か] 決めかねている

この観察について、本発表では例えば(1)については(3)のように、削除節ではCがVPを直接補部に取り、そのVPが先行節VPを先行詞として削除されると仮定することで統語的同一性条件を維持できると提案する。

- (3) 太郎は [CP [TP [VP どこかへ [v ik-]] [T -oo]] [c と]] していたけど、
君は [CP どこへ; [VP ~~と~~ [v ik-]] [c か]] 知っていますか

また、このような「例外的な」選択関係が、*Takita (2020)* の提案の下では自然に許されることを論じる。

シンポジウム要旨

英米文学部門

ジェンダーロールの呪縛と越境

司会・講師	関西学院大学教授	竹山友子
講師	武庫川女子大学教授	前原澄子
講師	奈良女子大学教授	齊藤美和
講師	近畿大学准教授	西垣佐理
講師	奈良女子大学准教授	中川千帆

シンポジウムのねらい

ジェンダー問題は元々男女間格差を中心に、特に女性問題として語られてきた。近年では SNS の普及も相まって様々な場における性差別、セクシュアルハラスメント、性別分業の実態などについて当事者の女性たちが声を上げる機会が増え、ジェンダー意識は一般社会に浸透してきている。また、現在ではジェンダー問題は男女間だけでなく LGBTQ など性的マイノリティの問題も含むようになり、さらには人種、階級、セクシュアリティ、アビリティなど数々のカテゴリーが交差するインターセクショナルリティの領域へと移行しつつある。そのような背景を踏まえ、本シンポジウムでは文学作品が一般市民の手に届き始めるようになった初期近代以降のテキストに表出される規範的ジェンダーロールに焦点を当て、作者も含めて性別にかかわらずジェンダーロールに縛られる姿、あるいはそれと格闘し越境しようとする姿を分析する。時代、文体、ジャンルの異なる多種多様な作品に意識的あるいは無意識に記録されるジェンダー問題の痕跡を探るとともに、その意義について論じたい。

ジェンダーロールの曖昧性

——『西国の美しい娘』（第1部）のベスを中心に——

武庫川女子大学教授 前原澄子

トマス・ヘイウッドが1590年代に創作した『西国の美しい娘』（第1部）では、職人の娘に生まれたベスが、紳士階級の恋人から譲渡された居酒屋の経営者となって商才を発揮する。ベスは言い寄る男性を躲して恋人への貞節を守り、不埒な男性客には男装して決闘を挑む。また、スペイン船との戦いに赴いた恋人の訃報が届くと遺体を捜すために船を買い、残りの財産を慈善に託す遺言書を残して、男性仲間と海賊になってスペイン船に立ち向かう。このように、ベスには恋人への貞節という古来の女性の美德に加えて、未婚にして未亡人とも言える女性ならではの主体性と経済力が与えられている点は注目に値する。発表では、当時の巷間に流布した、恋人の仇を討つ女性戦士のバラッドや、弱きを助け強きを挫く女性像などを視野に入れて、『西国の美しい娘』（第1部）のベスを中心に、英国初期近代の言説におけるジェンダーロールの曖昧性について考察したい。

同性への愛と罪の意識

——友愛とホモエロティシズムの狭間——

関西学院大学教授 竹山友子

リチャード・バーンフィールドの *The Affectionate Shepherd* (1594) は男性間のホモエロティシズムが描写される詩とみなされている。しかしアラン・ブレイはこの詩における同性愛的描写は文学的創作であり、「友情をあつかった文学ジャンルの産物」としてホモエロティシズムを否定する。一方、王政復古期に活躍した女性作家アフラ・ベーンは、女性同士の愛情をうたう詩 “To the Fair Clarinda, Who Made Love to Me, Imagin'd More Than Woman” (1688) を発表している。この作品も女性同士のエロティックな愛情をうたう詩とみなされる一方で、リバティニズムの潮流に乗った友愛詩として読むことができる。本発表では、二人の詩作品に描写される同性同士の愛情が当時のジェンダーロールの範疇に収まるものなのか、あるいはジェンダーロールの越境を示すものになりうるのか、話者の罪の意識を手掛かりにセクシュアリティの問題も含めて考察したい。

すっぴん崇拜と初期近代の化粧談義

奈良女子大学教授 齊藤美和

化粧した女の顔、あるいは女が化粧をする行為への言及は、初期近代イングランドにあつては枚挙にいとまがない。化粧の是非をめぐる議論は、自然と人工、真実と偽り、実体と見せかけ、簡素と装飾といった、二項対立を軸に展開する。白塗りの顔の下に潜むと目されたのは、老醜ばかりでない。虚栄心や高慢、姦淫、果ては殺意に至るまで、化粧は隠すよりはむしろ女の本性を露わにする仮面として、その罪深さに対し繰り返し警告が発せられた。同時代の詩人たちが女の容姿を褒め上げるとき、それが装わないありのままの美しさであることが、明に暗に仄めかされる。発表では、「素のままでも美しい」ことが執拗に求められた時代の化粧をめぐる言説に着目し、女が密やかに化粧に腕を振るう私的空間が、男の公的な活動空間と対立するのではなく、時には映じ合うように、時には侵食し合うように、描出されていくさまを、Margaret Cavendishらの作品を取り上げ概観してみたい。

ヴィクトリアン・マスキュリニティの確立と男性による看護
——『嵐が丘』を中心に——

近畿大学准教授 西垣佐理

ヴィクトリア朝イギリスにおいて、男性性をめぐる議論は家庭内の父権制確立と同性愛に関するものに二分される。その中で、家庭内における男性性確立と文学作品に見られる看護表象が結びつく場合がある。当時の看護行為は、通例女性登場人物が行う家庭内義務の一環として描かれた。ところが、男性登場人物による看護行為が物語内で描かれ、男女の役割分担の逆転が発生している例も見られる。例えば、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』(1847)で、エドガー・リントンが病に倒れた妻キャサリンを看護する場面がある。この行為こそ、ヒースクリフがエドガーを男らしくないと批判する論拠にもなっている。本発表では、エドガーの看護行為が物語内に及ぼす影響をヴィクトリア朝時代における男性性確立の議論と関連づけて論じ、男性による看護表象の意義を他の作家による同様の事例、特にチャールズ・ディケンズの作品を参照しつつ多面的に見ていきたい。

女性の居場所と職業

——看護師探偵 Hilda Adams と Sarah Keate——

奈良女子大学准教授 中川千帆

1970年代末以降、第二波フェミニズムのなかで登場した女性探偵たちは、男性社会である警察や私立探偵の世界の中で戦ってきた。しかし、20世紀初頭から黄金時代の推理小説の中でも女性探偵は多く描かれている。保守的であるとされるこれらの作品の中で、彼女たちは表立ってジェンダー規範と戦うことはせず、最終的な解決も警察権力に委ねることが多い。だが、そこにはささやかで複雑な抵抗を見ることができる。アメリカの女性作家 Mary Roberts Rinehart の Hilda Adams シリーズと Mignon G. Eberhart の Sarah Keate シリーズでは、看護師探偵が他者の家庭の中に入りこみ、人々をことこまかく観察し、犯罪者を見つけて解決する。ヴィクトリア朝的「女性らしさ」を体現する職業を持ち、家庭内を主に仕事場とする彼女たちが、どのように境界を侵犯し、ジェンダーイデオロギーに疑問を投げかけているのかを分析する。

英語学部門

インタラクションの中の言語学

司会・講師	京都工芸繊維大学教授	深田 智
講師	大阪大学教授	早瀬 尚子
講師	杏林大学准教授	八木橋 宏 勇
講師	桜美林大学准教授	多々良 直 弘

シンポジウムのねらい

人は日々、他者とインタラクトし、他者と協力しながら生きている (Enfield and Levinson 2006; Tomasello 2019 など参照)。そして言語は、この他者とのインタラクション、ひいては、人の社会性の獲得・形成において大きな役割を果たしている (Ochs and Schieffelin 2014 など参照)。

本シンポジウムでは、語や構文の意味・用法を、主に叙述のことばに注目して記述・説明してきた従来の言語学・英語学の知見をもとに、人同士のインタラクションを取り上げて分析する。インタラクションの現場で用いられる言語表現は、辞書等に記載されている意味や用法の範囲を超え、とどまることなく創造的に用いられている。その動的な側面を記述し、言語学とインタラクション研究双方の発展に寄与しうる新たな知見を提供することを目指すとともに、場面や状況、時代や言語を超えてみられる人の共通性や普遍性にも目を向け、AI とは異なる人の特徴に関しても言語学の立場から検討したい。

言語学的要素からインタラクション分析への橋渡し

——意味論・語用論的概念を応用して——

大阪大学教授 早瀬 尚子

インタラクション研究というと、対話など実際に使用される談話中で立ち現れる動的な表現や意味を扱い、近年では身振りや立ち位置といったマルチディメンショナルな要素も考慮に入れて分析を行っている。そんな中、本発表は敢えて従来なじみのある言語学的概念を用いることで、どこまでインタラクション研究に近寄れるかの試論を展開する。いわば、言語学プロパーとされる概念をインタラクション的に応用する可能性をさぐるものである。具体的には、言語学概論などで扱われる基本的な意味論・語用論的概念が実際の対話の中で見られること、またそれを話者が無意識的に使用することで結果として話者自身の思考や認知を露呈していること、あるいは、話者がこれらの概念を方略として作為的に用いることで、相手に働きかけていることを示す。さらに構文論的観点から、聞き手に思考の方向を指示する機能をもつ表現が生まれ使用されることについても触れる。

※ 本発表は事前収録のビデオ発表になる予定です。

インタラクションと表現のバリエーション

——“the reason is because”と“the reason being”を中心に——

杏林大学准教授 八木橋 宏 勇

本発表は、対話で用いられる理由を導く表現に焦点をあて、正用法から逸脱しながらも一定の頻度が認められるバリエーションの使用実態を論じる。言語使用において頻繁に観察される表現であっても、規範からの逸脱には厳しい目を向けられることが多い。たとえば、“the reason is that SV”は「正しい」とされているが、“the reason is because SV”、“the reason being is that / because SV”、“the reason being that / because SV”などは「間違っている」と評されている。しかしながら、言語表現は、どれも一定の動機づけがあって生み出され、何かしらの理由があってバリエーションが生じていると想定される。本発表では、バリエーションが生み出されやすい(文法的)環境をインタラクションが提供している可能性を探っていく。

メディア報道におけるインタラクションの分析

——言語学においてインタラクションを分析する意義を求めて——

桜美林大学准教授 多々良 直 弘

メディア報道の参与者たちは、単に情報を視聴者に提供しているのではなく、その文化において期待されているスタイルで談話を構成し、相互行為を行なっている。本発表は、メディア報道という制度的談話におけるインタラクションの分析を通じて、参与者たちが社会において共有されている枠組みや社会的規範に則って、適切な言語表現や定型表現、スタイルなどを選択しながら相互行為を行っていることを示す。メディア報道において繰り返し広げられる相互行為や言語行動が我々の日常生活における言語使用や社会における規範といかに関係しているのか、相互行為の中でいかに即興的かつ創発的に言語表現が産み出されていくのか、そして言語学の分野においてメディア報道におけるインタラクションを分析することがどのような意義を持っているのかなどの問題を考察していきたい。

他者への行為の促しと引き込み

——養育者—子ども間のインタラクションデータから——

京都工芸繊維大学教授 深 田 智

子どもは、他者とりわけ養育者とのインタラクションを通して、その社会の中で望ましいとされる行為を獲得し、その社会を構成する一員となって、その社会や文化を継承・形成していく。本発表では、その過程で、他者から子どもに向けてどのような言葉がけがなされ、また、子どもはそれにどのような言葉や行為で応えていくのかを考察する。主として取り上げるのは、CHILDES データベース内の Eng-NA コーパス（北米の英語母語話者のデータ）から採取された、子どもの行為を促し、インタラクションに引き込む養育者のことばである。これらのことばが具体的にどのような場面や文脈で用いられているのかを子どもの年齢にも注目して検討する。また日本語の事例とも対照し、両者の共通性にも言及しながら、言語を超えた人同士のインタラクションの普遍性について考えたい。

大会準備委員

委員長： 石川 玲子（相愛大学・英文学）

副委員長： 莊中 孝之（京都女子大学・英文学）

英文学部門委員：

西出 良郎（神戸女学院大学）

吉田 朱美（京都府立大学）

米文学部門委員：

天野 貴史（摂南大学）

内田 有紀（龍谷大学）

英語学部門委員：

大宗 純（関西外国語大学）

米倉 よう子（奈良教育大学）

開催校委員：

秋元 孝文（甲南大学）

（五十音順、敬称略）